

# グーとポムのおはなし

さかい はるみ  
堺 春美

## 作品にこめたおもい

私たちは普段、見かけや想像で人の中身までを勝手に判断してしまいがちだと思います。うわさを耳にすれば自分の目で見たわけでもないのに、次の人へ教えてしまう。私もそれをしていましたが、ある出来事がきっかけでうわさというのはそれが事実でないとき、その人を深く傷つけてしまうんだなと感じ、私自身もしていたことなので反省させられました。そのような体験のあとにこのコンクールのポスターを見かけました。よろしく願います。

## 原作

ある森でのおはなしです。

コグマのグーは遠い森から あるものを見つけにやってきました。お母さんが熱を出してしまって おうちですっと寝ているのです。それでグーは よく効くといわれている薬になるお花を探しながら 森のなかを歩いていた。

すると小鳥がはなしかけてきました。「きみ みかけない顔だね、今からどこへいくんだい？」グーは答えました。「薬のお花をつみにいくところなんだ」小鳥はいいました。「それじゃあ あそこへ行くんだね。きみ、すごく勇気があるね」グーにはなんのことかわかりません。首をかしげると、「あのお花の咲いている場所には それはそれは大きな怪物が住んでいるんだよ。きみ 食べられちゃうかもしれないよ。」「わあ、じゃあきみは その怪物にあったことがあるの？」そうきくと小鳥は「リスがいていたよ」と答えました。そして小鳥は「じゃあ気をつけて！」と行ってどこかへ行ってしまいました。グーはちょっと怖くなってたちどまってしまいましたが、お母さんを治してあげたいのでいくことにしました。

森のなかをすすんでいくと いろんな動物が はなしかけてきて、「本当にいくの？」「怖い目に あうかもしれないよ？」と心配してくれましたが、やっぱりお母さんを助けてあげたいので 帰ろうともしませんでした。ただグーは ずっと気になっていることがあります。

ました。みんなその怪物の はなしをしているけど だれもその怪物を「見たことがあるの？」ときくとみんな、ほかの動物からきいたというのです。

ずっとずーっと歩いていくと 小さな湖がみえてきました。そしてよく見るとその湖のほとりに青いお花が咲いています。グーは「やっとみつけた！」と大喜びで近づいていきます。すると、横から大きな影がやってきて見上げると、それはそれは大きな体の毛むくじゃらのボサボサな毛並みのみにくい姿の生き物が たっていました。グーはびっくりして後ろにころんでしまいました。「うわー！お願いだから僕を食べないで！」手で顔をおおってひるえていると、その怪物は「食べたりしない。」そういって、やがて背をむけて木の陰にかくれてしまいました。耳をすますとなんだか泣いているような声がします。おおっていた手をそっとあけてグーはそおーっと木の陰をのぞきました。「泣いているの？」そうきくと怪物は「僕は怪物じゃないよ」とぐしゃぐしゃの顔で涙をいっばいためていいました。グーはなんだか胸がチクチクと痛くなって、あやまりました。「ごめんね！僕びっくりしちゃって、本当にごめんね」するとその生き物は「僕と反だちになってくれない？」と自信なさそうにいいました。…「もちろん！きみ名前はなんていうの？」「いいの！？ポム…僕はポムっていうんだ！本当にいいの？」ポムは目をキラキラ輝かせてもうそれはそれは嬉しそうに笑いました。「ねえ、僕はいまからお母さんのところへ戻る。だからまた明日会おうよ。」そして明日会う約束をしておうちに走って帰りました。

お花をお茶にして お母さんに飲ませると、すぐに熱が下がって お母さんは元気になりました。グーは森であったことを全てお母さんにはなしました。するとお母さんはグーにいいました。「きっと うわさの虫のしわざね、これから だれかの悪いうわさをきいたときはね、こう考えるのよ。もしそのうわさがウソだったとしたら、そのうわさされている子が どんなに傷つくだらうって想像するの、そうしたらうわさの虫はきっと居場所がなくなって どこかへ行ってしまはず」グーはお母さんのいったことが なんだかよくわかりました。

そして次の日ポムのもとへ戻ると ポムをみんなに紹介しました。ポムは毛むくじゃらで変わった姿なので、みんな はじめはびっくりした様子でしたが やがてポムの優しい心を知るとポムのことが大好きになりました。しばらくしてグーは お母さんとこの森に引っ越してきて、みーんないつまでも仲良く幸せにくらしました。

おしまい